

大通 和座 通信

# YAMATOZA

## 日々新面目

其の二十

安東伸元

多事多難であった一年がようやく暮れに及びました。ひとまず大和座と家族の無事を喜びます。千里中央に腰を据えて催してきたシリーズ公演「古典伝統芸能と出会うひととき」は五十回目を数えるに到りました。大和座通信も九十三の号数を重ね、今年も年間六回の発行を果たせました。ものを書くということは、日頃に得た知識や経験を整理し、自身の思考を鍛錬する作業でもあります。若い座員の人は、懸命に自己を修練する執筆に努めてきました。その結果自身の中に納まった意思の表示と行動が何方かの眼にとまり、新しい活動の場を得る展開がいくつか生まれました。また一方で、このような大和座の思想とそれに伴う活動行為が、古典伝統芸能文化の規範に照らしてよろしくないとする物言いを受け

る出来事もありました。流派及び家組織の枠組みを逸脱すると言う指摘です。純粹に芸術創造の真理に従う信条をもつて真面目に生きている者を容認しないこの社会に深いやりきれなさを感じて、これまで嘗々と「日々新面目」を書き続けてきました。執筆に際しての多くは、大和座の基本的な行動論理を内外に開陳して同志の有無を推し量り、また大和座の旗の下に参集する若い人たちの指針にもなるうかと思つて、歳に合わせ青臭い文言を書き連ねてきました。もちろん自戒自省の念を込め、恥を忍ぶ想いで書きしたためてきました。さて、2007年を締めくくるにあたり、今一度の書正論にお付き合い願います。エクササイズという言葉が流行しています。別に新しい思想でも理論でもないものが、カタカナ文字のかっこ良さが一人歩きしているのか、さも最新の英知であるかのような紹介をされて、さまざま話題を提供しています。その中で、殊に古典伝統芸能にあつては、それぞれの分野名称にエクササイズの単語をかぶせると新装開店の活気や、好奇心を呼び覚ます華やかさが醸成されるようです。と言つても、私はこの様子に批判的な注文をつけようとしているではありません。どのような勧誘であれ、興味を喚起されるのは結構なこと。今秋から「狂言エクササイズ」というタイトルでNHK大

阪文化センターに講座を開く事になった金久君も、当初この名称にいささか抵抗を示していましたが、心配をよそに開講を可能にする人数の参加を得ることが出来、その後順調に進展して来期の継続開講も決まりました。これに勇気を得て、彼は狂言の演劇的意味を抽出する、新しい狂言エクササイズの切り口探索にいよいよ精励するだろうと思えます。「素人稽古」という言葉があります。古典伝統芸能の世界にあつて、ほとんどの稽古人はまず自分がプロフェショナル（玄人）になるわけではないと自らも師匠も認識し、其の上で趣味としてその遊芸に親しみ楽しむような稽古が始まりますが、その様子をそう呼んでいるのです。その結果、生徒を遊ばせるに近い楽しさを主軸にした稽古事・習い事が古典伝統芸能の地盤を支えることとなります。洋楽のレッスンには、基本的に生徒の心技をひたすら鍛える姿勢に貫かれています。この修練方法はたとえプロにはなれなくとも、良し悪しの批評が出来る耳と心を持つた良い音楽愛好者が育つことを可能にします。そこでプロは、この怖い鑑賞者たちの存在によって、絶えず技量の研磨と高度水準の堅持を課せられ、結果全体の質が低下しないという良い結末を得ます。わが国の古典伝統芸能の修練については、個人が自発的に心身の鍛錬を目指して励まない限り、

普通の稽古人は濃密な基本訓練を受けることがないので、何時までたってもいわゆる素人臭さの残る域を脱することができません。つまり最初から素人と玄人の領域が隔絶して存在していて玄人と見做される者は、このように作られた素人集団に対して、自分の安泰が保証されるという図式があるようです。特定の或る事に習熟した人間には、其のことに関わる上で必然的に派生した肉体の変化が見られます。オペラ歌手とバレリーナの身体は一目瞭然に違いが判ります。弦楽器と管楽器の演奏者も綿密に観察すると明らかに風体が違っていて、この楽器の演奏法の違いがもたらせる体形の変化に納得がゆきません。能楽師は、能舞台の上での揺るぎなく安定した運足を可能にするために、四肢の骨格が変形しています。長年の稽古によつて生じた変化で、つまりこの体形を手に入れて紛れもなく能楽師の体になつたと言えるわけです。朝夕読経の勤行を欠かさぬ僧侶の声は、声楽家を圧倒する声量と説得力をもちます。大正から昭和の始めにかけて活躍した古典落語の名代師匠がよく紹介されますが、この師匠たちには声と語り口はもちろんのこと、高座でのたまたまいや風貌にもそれらしい風格が感じられました。長年月落語の話芸に打ち込んだ末に体内に注入されたものが、観客に何らかの感銘を与えるのです。日本のイ

ンテリジェンスを代表する学者や作家の中に、落語を愛好する人たちが少なからずおいでであったと言つた話は十分な納得を呼びます。音響装置(マイク)に頼らない話芸は、訓練と綿密な計算を施された声の強弱や言葉の間(ま)によつて、日本語の心地良い味をたつぷりお客へ届けたはずです。さまざまな芸能には、それぞれに独自の魂と仕掛けがあります。その正体を探つて取り出して、わが身内に摂り入れる事が即ちエクササイズです。正確なエクササイズを体験すれば、必ず心身に変化がもたらされるでしょう。近年色々な所で紹介される大きなカルチャーショックを伴つた話題になつているものに、古武道の型と作法を日常生活へ活用させる術というものがあります。武術の身体技法を説かれる甲野善紀氏の言葉は「型」ということを考える時、きわめて明解です。有効な体の使い方をさせるために、ついやりやすいから動かしてしまつ常識的な動きを封じる必要がある、という説明は狂言にも通じます。よく言うところの素人臭さというもの、この理解が達成されていないから消えないわけです。「型」を必然的にそうあらねばならない精髄と考えないで、その芸能特有の風様や情緒を伝えるものと理解して、それを体験式に学習するという方式が古典伝統芸能の世界に広くはびこつて存在しています。体験

学習講座においては初体験の興味をくすぐつて、当然うまく出来ないことに一言一憂する大勢が、一緒になつて楽しむ式のカリキュラムが用意されます。これはまさに、遊園地でいろいろな見世物や乗り物を楽しむ事と変わりがありません。この場合、教える側に「生徒さん達は、お素人だから」という認識があり、教わる側にも「所詮私は素人だから」という思いが働き、このようなどうにも奇妙な師弟関係が、「ごっこ」のようなお遊び講座を成立させるわけです。『参つた、参つた、参りました。いやあ可愛かつた！涙が出て感動した。ありがとう安東さん！かねてから貴兄は尊敬する同級生のお一人ですが、ますます狂言に惹きつけられました。大和座の「室町心を謡おう」には出来るだけ参加させて頂いて……』これは平成十五年春に受け取つた便りの一節です。便りの主は、北野高等学校時代の友人、岩倉一雄君です。その岩倉君が今秋十月急逝されました。突然の訃報についての驚愕と深い悲しみが襲つて、未だ彼を追慕する念が鎮まらないまま、この紙面を埋めています。文面は、幼稚園児であつた娘を子猿に「靱猿」を上演した時の感想です。私はこの一通の葉書にどれほど勇気付けられたか知れませんが、以降彼は、大和座を級友はもちろんのこと、及ぶ限り広範に宣伝して千里中央へも、最近では繁

昌亭へも毎回のように足を運んでくれました。私はこの「靉猿」を大和座のスタッフだけで上演することに踏み切りました。朝日新聞社の林梓生氏は、「こどもの日」に合わせたA&Hホールでの再演に、この子猿を探り上げ筆援してくださいました。ところで大和座の活動について、いささか懸念していた物言いがやはり遅れて届いてきました。これまで秘匿していた事ですが、敢えて申し上げることにします。かつての師家の跡取りが、ある日、私を「お前」呼ばわりして面罵しました。いちいち書くこともばかばかしい事柄は省いて、彼は最後に次のように申しました。「お前が居ると大蔵流のわれわれが迷惑するから能楽協会も辞める！」。成人して以来、私は親以外の人から「お前」呼ばわりされたことがありません。その上明らかに年長の私にたいして、あたかも奴婢に物言いするがとき言葉使いで罵り、しかも一人の人間の生き様に重大な誹謗発言をする彼に、正直悲しさを覚えます。このような物言いをしてはばからない特権意識は、何によって作り出されるのでしょうか。紛れもない家筋の玄人であると国が認めていると自負し、その上で私のような身分の者を素人の出身であると見下すが故の言動なのでしょう。自負心を抱くことも、エリート意識を強力に持つことも結構なことです。むしろ家筋を

名乗る以上、そうあらねばなりません。しかしそれをかさに着た居丈高な振る舞いは、如何にも品性に欠けると言えるでしょう。幼児が一人懸命に舞台を勤めた健気さを、素朴に祝ってやる気持ちが出てこないのは、人間性の欠如とも取れます。人間に對する深い愛がなければ、すべての演劇は成り立たないでしょう。大和座の若い座員には、能楽協会に所属していないから狂言師と名乗ることを自粛するようという指摘が、他から届いていたので心するようにと師家から忠告がありました。大蔵流の狂言を後進に教える者として、私は不適格であると思われるようです。狂言という古典演劇の精髓を探るエクササイズと狂言稽古の普遍を考究するメソッド作りに、背水の陣を敷いて模索を始めたと思います。今年一年、大和座狂言事務所の公演を支えてくださった皆さんへ心の底からお礼を申しあげます。ありがとうございました。この公演は、来年度も継続いたします。明らかに座員の心身に変化が起こって、正真正銘の玄人であると認知して頂けるよう鍛錬を積み重ねると、皆さんにお約束したいと思えます。年中に皆さんから頂いたお便りは、驚くほどの数になっております。大和座通信は、能楽研究機関の幾つかに収まり、長く架蔵して下さる由の返事を頂くようにもなりました。座員諸君へは、い

よいよ覚悟を決めて自分自身との戦いに、わが身を挺してほしいと思います。少々大げさな言い方ですが、人生を賭ける勢いがかからねば、本物は手に入りません。今の世の中、効率良く立ち回る才覚があれば早い生活が手に入るような風潮が充満していますが、ギリシヤ悲劇が上演されたとき以来、演劇に関してはそのようなかつこ良さは存在も通用もしません。今日、忘れ難い盟友の岩倉一雄君、京都市立芸術大学音楽学部大学院を終えて、クラシックの世界から劇団「四季」に身を投じ、中堅の重責を果たしながら今年四十三歳の秋九月、病魔に倒れた小林克人君、大阪芸術大学舞台芸術学科の学外公演「狂言レビュー」に、ご退職後も毎年足をお運びいただき学生を励まして下さった村中向陽先生、このお三方のご他界を悼み冥福を祈って追善の謡を捧げたいと思います。最後に今年を締めくくるにこの上ない出来事を一つ報告いたします。奇しくもこれを書き終えた今日、日曜日の朝日新聞朝刊に「継承」の言葉が目を射る林梓生氏の署名記事が出ました。私はまた、蝶六さん親子と、私と娘を探り上げてくださる、「大阪力！」と題した筆援の記事を頂きました。

(霜月二十五日)



## 狂言を読む「戦い語り」

山田師久

安東 伸元（あんどつ のぶもと）  
一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会  
入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。  
一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国  
際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住  
吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤  
講師。二一年、重要無形文化財（能楽）保  
持者総合認定を受ける。「日本能楽会」会員。  
「大和座狂言事務所」を主宰。

先日、蒐集家の同僚が転居を機に、三十年の長きにわたって買い集めた書籍を処分した。座席が近いので苦渋の選択にいたるまでの経緯をつぶさに聞かせていただいた。彼は二千冊を超える蔵書のほとんどを二束三文で古本屋に買ったかれ、残った和書類（江戸時代の写本や版本）の処遇をどうしようか相談をもちかけてきた。私は「処分するぐらいなら私が買い取ろう」と申し出たが、なかなか決断にはいたらなかつた。そのうち転居を終え、いよいよ旧居に残された和本、五百冊を何とかしなければならぬ事態になって、ようやく引き取りに来てくれということになった。そこで、都合のつかない私の代わりに古書好き三名が引き取りに行き、大量の和本を職場に持ち帰り、地下倉庫に古書店のごとく積み上げた。翌日、私は地下倉庫に行き物色しかけたが、突然くしゃみの発作に襲われ五分で退散した。「そりゃ、長年のダニやホコリが一杯だからね」と顔色も変えずに言っていた彼が「捨てるよりは持つて帰ってほしい」と再び地下倉庫へ私を連れて行き、それぞれの本の特徴や購入に至る因縁話、価格などの講釈をしながら、残すべき本十数冊を積

み上げてくれた。ふと見ると彼も小脇に数冊、抱えているではないか。「自分が捨てた本をどうするの」と尋ねると「やっぱり惜しくなったので持つて帰る」ということだった。一度に全部持つて帰ると家人と一悶着あるので、二・三冊ずつ鞆に詰め込んで帰るのだ。今日も帰る間際、鞆に詰め込もうとしていた謡本を眺めながら「謡曲は読んでいるとリズムがあつて良いが内容が重いね、狂言歌謡だと軽いから現代人でも声にだして読むと気持ちがいいね」といつ。私も同感の意を伝え、『閑吟集』に入っている狂言小謡の一節を紹介した。内容の軽重はともかく、どちらも五七調だったり、四四五調であつたり、ともかくこれらは拍子をつけて歌うと気持ちが良い。そして体にしみこむように言葉が入る。それは論理的な理解ではなく、感覚的な理解とも言える。彼は「古典はただ、読むだけで良い。これを読んだらどうなるかという実利を求めるとより声に出して読むだけでよい」という教養主義の良さを主張した。彼の話に相槌を打ちながら、確かにそのとおり、功利・実利に走りすぎている中学・高校の勉強方法を思い、からだに入ると読む方こそ大切なことだと感じた。

さて、そのように声に出して読むことからだに入る作品は謡や狂言小謡のようなものばかりではない。『平家物語』のよう

に琵琶法師が語って歩いた作品は、声に出して読むことで自然とからだに入るものである。読んでいてリズムがあり、歯切れが良い。例えば『平家物語』巻四「橋合戦」の段を見ると、次のとおりである。「五智院の但馬は大長刀のさやをはずして、只一騎で橋の上に進み、平家の方にはこれを見て「あれ射とれや者共」とて、究竟の弓の上手どもが、矢さをそろへて、さしつめひきつめ、さんざんに射る。但馬すこしもさわがず、あがる矢をばついくぐり、さがる矢をばをどりこえ、むかつてくるをば、長刀で切つておとす。かたきもみかたも見物す。それよりしてこそ矢きりの但馬といはれけれ。」と語られる。また筒井の浄妙明秀の名のりもりズムが良い。「『日ごろは音にもききつらむ、今は目にもみ給へ。三井寺にはそのかくれなし。堂衆のなかに、筒井の浄妙明秀といふ、一人当千の兵者ぞや。われと思はむ人々は寄りあへや、見参せむ』とて、二十四さいたる矢を、さしつめひきつめさんざんに射る。(中略)長刀で向かふ敵、五人なぎふせ、六人ある敵にあつて、長刀中よりうち折つて、すてんげり。くもで、かくなは、十文字、とんばうがへり、水車、八方すかざり切つたりけり。やにはに八人切りふせ、九人にあたる敵が、甲の鉢にあまりにつよううちあてて、目貫のもとよりちやうど折れ、くつとぬけ

て、河へざぶと入りにけり。たのむところは腰刀、ひとへに死なんとぞくるひける。」(『平家物語』小学館古典文学全集)と歯切れ良く語る事ができる。戦語りは歌謡や小謡のようにならびりとしたリズムではない。命を賭けた戦いの場面は早いリズムで強い口調で語られなければならない。そうすることで合戦の緊迫した状況が聴衆に伝わるのだ。

さて、狂言にはこのような語りの文学から表現を取り入れていることがよくある。そういう軍記の合戦場面の語りを取り入れたとおもわれるものに狂言「空腕」がある。この狂言に登場する太郎冠者は常日頃から「空腕立て」をするというので「空腕」という題名になった。「空」とは「いつわりの」という意味の接頭語であり、「空恐ろし」「空言(そらごと)」「空寝」「空騒動」などと使われていた。「腕立て」は「腕自慢」である。だから太郎冠者は普段から「偽りの腕自慢」をしていたというのだ。

日ごろから偽りの腕自慢をする、生来臆病者の太郎冠者は淀・鳥羽という物騒な場所に買い物を言いつけられ、暗闇で何者かに太刀を取り上げられる。手ぶらで帰宅した太郎冠者が弁解に語るのが、平家語り顔負けの戦語りである。彼が途中で矢を射かけられて脅されたと語る場面では「その、

弓矢を雨のごとくおこしまするによつて、上へ参る矢は身を縮め、下へ参る矢はおどり越え、向かう矢を片端よりぱらぱらと打ち折つてござれば、もはや矢種も尽きたと見へまして、皆一緒に抜いてかかります。私も側なる大木を後盾に取つて息をほつとし、大音声で名乗りました。「やいやーい、遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。某は頼うだお方の御内に一騎当千と呼ばれた太郎冠者じゃ。我と思わん者は何百人なりともいざ来い。と申してござれば、彼らの申しまするは、あれこそ音に聞こえた太郎冠者、聞いたよりは手柄者、さりながら多勢に無勢、叶うまじいと有つて、皆一様に切つてかかります。むかう者は拝み打ち、車切り、雲手、かくなわ、十文字に切つて切つて、切りなやいてござる。」と語るのである。

『平家物語』の合戦描写と太郎冠者の空腕立てとは重なる表現が多い。これら軍記物を含む語り物によくある、同じ様な表現が何度も出てくる箇所を常套句と呼ぶ。どんなに優れた武将であっても、『平家物語』の但馬や太郎冠者のように飛んでくる矢をかいくぐつたり、飛び越えてよけることなどできないことだ。また明秀のように「くもで、かくなは、十文字、とんばうがへり、水車、八方すかざり切つたりけり」のような八面六臂の大活躍は現実にはできるはずが

ない。当然そこには誇張があり、それが語り伝えられるうちに空腕立てのようなものに使われるのだ。『平家物語』・『保元物語』・『平治物語』や『太平記』などの人口に膾炙した軍記物は誇張表現が多く使われている。「都合その勢二万八千余騎」といつても、二万人の軍勢が現実に押し寄せたわけではない。誇張されたものだと考えて読むのがよい。その誇張表現にならって太郎冠者は腕立てをしただけのことだ。狂言では太郎冠者のいくさ語りが興に乗れば乗るほど、空々しく聞こえ、観客はその嘘が露見することを期待する。そして期待通り露見することで観客の笑いは一層大きくなるのである。

かくいう私自身もこの稿の序文に「二千冊」「五百冊」と書いたが、実際の数は知らない。二千冊以上かも知れないし、千冊以下かもしれない。彼の書齋の様子を毎日聞かされて想像したまでのことだ。物語とはどんどんふくらむから面白い、拍子をつけて語るともつと面白くなるものなのだ。

了



山田 師久(やまだ もろひさ)  
大阪生まれ。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術ブレン。月例<sup>△</sup>輪讀会<sup>▽</sup>の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

## 離見の見 ～昭和任侠伝より～

森五六九

極道の世界に憧れる男がいた。任侠映画に感化された男は着流しに雪駄履きがいつものスタイル。気分は高倉健だが見かけは実に弱々しい。「義理と人情を秤にかけりや義理が重たい男の世界」こ存じ高倉健の「唐獅子牡丹」を鼻歌まじりに町を闊歩している。

故春蝶が自作自演で演じた新作落語「昭和任侠伝」の出だしである。新作とはいえ初演されたのがもう四十年前も前の事。当時は東映映画の任侠路線が大流行りであった。私が入門した昭和五十七年頃、春蝶は角座でこの作品をよく演じていたものだ。例の鼻歌を口ずさみ高倉健よろしく「我こそ男の中の男」気分です歩いていって、背中越しに「お兄さん、ちよつと風呂行きのお兄さん」と若い女性の声。振り返れば水もしたたる絶世の美女。「うわあ、ええ女や。こういうシーンは映画でもよう見るで。わいが高倉健で、向こうが藤純子・・・」根は俗なただの助平である。「任侠の道は女にジャラジャラしているようではいかん」とばかりに気を取り直して彼なりに男っぷりを通そうと発した言葉が「おっと姉さん、寄っちゃいけねえ、このままそつと行かしてやつ

てくんなさえ」すると、件の女性「石鹼落としてますよ」・これほど恥ずかしい思い込みもそうあるまい。

その後、男は仁侠の道は彫り物とばかり彫師の元へ出向いた。「彫り物というのは我慢ちゆうぐらいのもんや。少々痛い很辛苦せえよ」グツと顔をしかめながら「男一匹少々のことで根を上げるようなあつしやございせん」と強がる男に彫師がぼそつと一言。「まださすつてるだけやで」この作品はもちろん仁侠映画のパロディーには違いないのだが、春蝶の面白さはむしろその小市民の描き様にあつた。「落語のなかには、人生のありとあらゆる失敗と恥ずかしさのパターンが入っている」とは東京の立川談志師匠の言葉だ。

私にもこんな経験がある。ある地方で落語会があり、終演して会場を出ると目の前にカメラを持ってはじめしている二十代の女性が現れた。「ははん、先程私の落語を聞いていて、それで私と写真を撮つて欲しいと言っただな」そう合点した私は自分の方から彼女に声を掛けた。芸人にとってファンサービスも仕事のひとつ。「写真で何か？いいですよ」「すみません」しおらしく礼を言う彼女の横に並ぼうとした。すると件の彼女「このボタンを押すだけですから」・・・次の瞬間、私は美男美女の似合いなカップルの写真係と化していた。

「はーい！もうちよつとくつついて下さい。うわあ、ええ感じですね」落語「昭和仁侠伝」ではこの手の恥ずかしさが次々と紹介されていく。

古典落語では例えば「転失気」という咄。医者から「転失気はあるか」と聞かれ、何の事だか分からないのに知つたかぶりをする寺の住職。実は転失気とはおならの事なのだが、それを知つた小坊主は「転失気は盃です」と住職に嘘をつく。さつそく医者を呼んで「素晴らしい転失気をお見せしましょう」とさも自慢げにふるまう住職。私は昔ラウンジのカウンターに入つていた事があるので、これに似た御仁を嫌というほど見てきた。地位だけを笠にふんぞりかえつていける男ほど哀れである。控え室で噂している女の子たちの会話を聞けば「こんな店、二度と行きたくない！」と思うであろう。思い込みの激しいエエ格好しいはとてモ格好悪いのである。でもそこが人間の可愛らしさであり、それを描くのが落語の最も得意とするところである。

「萩大名」という狂言。大名といつても江戸時代ではなく中世の大名だから加賀百万石といったそんな御大層なものではなく、田舎のちよつとした領主といった身分だろう。所用あつてちよつと長々と京都に滞在している。「遠国に隠れもない大名です」そのまま訳すと「遠い国では誰知らぬ者が

ない」と威張つて見せるが、裏を返せば「京都では全然名前の通つていない田舎大名」ということである。そんな事にも気がつかず堂々と威張つてみせるところがこの大名の可愛らしさ。そんなちよつぱり見え張りな大名が退屈しのぎにと訪れたのが萩真つ盛りの下京のあるお宅のお庭。しかし、そこに腰を掛けたならば当座（即興の和歌）のひとつも詠まねばならないのがこの家のお約束事。だがその程度の大名だから和歌を詠むほどの教養もなく、召し使いの太郎冠者からひとつの和歌を伝授してもらつことになつた。太郎冠者の知り合いが下読みにと作つた一首「七重八重 九重とこそ思いしに 十重咲き出る 萩の花かな」。

でも、この大名にはにわかには覚えられないはずもなく知つたかぶりをしながら大恥をかいていくというのがこの狂言の大筋。しかし、この大名自身は己がそれほど恥ずかしい存在だとは思つてはいまい。「転失気」の和尚然り。そこがまた余計愚かであり哀れである。「昭和仁侠伝」の男は多少なりとも己に照れがあるだけかもしれませんが。小市民と特権階級の違いだろうか。

舞に、目前心後という事あり。「目を前に見て、心を後に置き」となり。是は、以前申つる舞智風体の用心なり。見所より見る所の風姿、我が離見なり。しかれば、

我が眼の見る所は、我見なり。離見の見にはあらず。離見の見にて見る所は、すなわち、見所同心の見なり。その時は、我姿を見得するなり。我姿を見得すれば、左右前後を見るなり。しかれども、目前左右までを見れども、後姿をばいまだ知らぬか。後姿を覚えねば、姿の俗なる所をわきまえず。

世阿弥は「風姿花伝」の中でこう言った。見所とは観客席の事であり、離見とは他人からの見方、我見は自分本意の見方という意味。直訳すれば観客の目線で見る事が観客の心で見ることであり、その時自分の姿を見極めることができる。そうすれば自分の左右前後を見ることができ。しかし後ろ姿までを見極めることができなければ、舞に俗なところがあってもまだそれをわきまえていない、という内容。つまり、客観（離見）の大切さを世阿弥は説いている。

「風姿花伝」は芸の秘伝書として書かれたものだが、その内容は人としての生き方や振舞いにも通じている。落語も狂言も人間を客観（離見）から描いたものだ。ここにお客の共感がある。また、この視点から愚かな自分を見つめ直すこともできよう。個人主義の名のもと、権利や主張「主観（我見）」ばかりがまかり通っている今日、落語や狂言が問いかける意味は大きい。（了）

二〇〇七・十一・十三



森五六九（もり いさく）  
大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言  
方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大  
阪シナリオ才学校の各非常勤講師の他、ECCア  
チストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷  
高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ  
「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ま  
しい芸能人の在り方を模索中。

## 「俄・聴衆論」

井上放雲

好ましい舞台と聴衆の関係性について、  
考察を試みてみたい。

まず、話はいきなり脇道から入るが、デー  
ブな阪神ファンの方と野球のお嫌いな方は、  
しばらく読み飛ばしていただきたい。

実は、甲子園球場における阪神ファンの  
応援のやり方を私は非常に好まぬ。理由は  
アンチ阪神ファンだからではない。彼らの、  
攻撃中のべつ幕なしに繰り広げられる鳴り  
物と応援の連続に辟易させられるからであ  
る。それは野球を楽しむという姿勢よりは、  
むしろ鳴り物と大声での応援の様式にかこ  
つけて、己自身のストレスを発散させる事  
に主眼が置かれているとしか思えない。ま  
た7回の、俗に言うラッキーセブンでは、  
誰が決めたか知らないが風船を飛ばすお決  
まりの儀式がある。数年前、友人の誘いで  
甲子園球場に赴いた際、この風船を取り出  
したりふくらませている間や飛ばすタイミ  
ングを見計らっている時、多くの観客が実  
際目の前で行われているゲームをそっちな  
けにしているのを目の当たりにし、私は大  
変驚いた。もちろん彼らとてゲームの展開  
に無反応な訳ではない。ヒット・ホームラ  
ン・三振・ファインプレー・チャンス・ピ

ンチ、それぞれの場面に応じて激しく反応する。その反応の大きさは半端ではない。

これこそがまさに阪神の応援は日本一と言われる所以だ。しかし私は、それらがほとんど「結果」に対する反応である事が大いに不満だ。本来野球という競技は、サッカーのようにプレーが連続的に動き続けるタイプの競技ではなく、一見ちんたらした進行の中に見ている側も一緒に緊張したり作戦を考えるような間合いがあり、そこに目を見張るようなプレーが飛び出すことで一気に全体が盛り上がるような、メリハリの効いたドラマを見いだす事が可能なスポーツなのだ。絶え間ない応援は、その解放へ向かう前の緊迫感を台無しにしている。五万人の熱狂はすばらしい。でもその一瞬前に、五万人の静寂があればこそ、見ている側もプレーする側も、最高のパフォーマンスを楽しむ事が出来るはずなのだ。試しにそういう意識を持って、鳴り物のない国際試合やメジャーリーグの試合を観戦していただくと、私の言わんとする事は概ね理解いただけると思う。確か東京ドームでは、実際に年間の内何日かを鳴り物禁止にして「球音を楽しむ日」と称していた様に思うが、これは「球音を楽しむ」事を含め、「野球の本質」を楽しむ事に繋がっているのだと早く多くの人に気付いてもらいたい。さて、では音楽に於いて観客に何らかの

意識改革を促すことは、何かしら有効であると言えるだろうか。

今から10年以上前、ポーランドに留学していた時に、月に一回のペースでクラシック音楽の話をするというちよつとした講習会の様な催しの講師をさせていた。聞いた事がある。対象はワルシャワ在住の大使館や商社に赴任してこられた方たちの奥様方を中心で、みなさん音楽は好きだけれど特にクラシックに詳しい訳でもない普通の方たちばかり。茶話会の様な楽しい雰囲気の中、多岐にわたって極めてディープなクラシック音楽の話をさせていただいた。

その中でなかなか興味深い結果の出た実験をした事があったので紹介しておこうと思う。仕掛けは簡単だ。ショパンの短いピアノ曲(同一曲)を複数の異なる演奏者の録音で聴き、それぞれの演奏に対して技術批評・印象批評をもらい、また点数をつけてもらった。実験は、まずブラインド・テストから始めた。一回目、何の説明もせず、誰が演奏しているかも知らせないで聴いてもらい、全部の演奏録音を自分自身の感性で判断してもらう。みんな、普段は意識して批評したり点数を付けたりしないので必死だ。そして一通り全部の録音を聴き終えた後、二回目を聴く前に曲の楽譜を配り簡単な楽曲分析を試みた。ここが序奏、この部分が主旋律でこちらが対旋律、

これが伴奏、だからこのメロディーが聞こえてこなければ不自然でこの伴奏が大きすぎたら曲の魅力は半減しますね。またこの曲はショパン何歳の時の作品で、こんな事件があつてショパンはこんな心理状態でした……等々、曲の構造や背景を説明し作品の理解を促した。音楽は自由に聴いて良いものだ。しかし作曲家が作品を世に送り出すにはやむにやまれぬ動機があり、作品には具体的あるいは抽象的なメッセージが込められている。それを理解出来たり感じ取ったりする事が出来るのと出来ないのでは、全く意味が違ってくる。そして2回目の聴き取りと採点を行った。すると不思議なほど、先ほどの聴き取りとは全く違った印象と採点が続出した。念のため3回目の聴き取りも行い、この時初めてそれぞれの演奏者を明かしてみた。ちなみにこの時選んだ演奏録音は、クラシック好きならずとも誰もが知っている巨匠のものやショパン・コンクールの実況録音、ショパン・アカデミー留学生の実技試験の録音など、有名無名おりませしておいた。この実験の目的は、実験結果を統計して演奏に順位をつける事ではなく、聴き手の意識付けによって演奏の評価がいかに変化するかという部分にあつた。面白かったのは、超有名な巨匠が一回目の印象批評でも2回目の楽曲分析との照らし合わせでも案外評価が低くて、名前を明か

した後みんなで大いに驚いたりしたし（この曲との相性が悪かった？）、またある無名の学生が実に印象もよく、また楽曲をよく理解をして演奏していると気付いたりもした（もつとも今では第一線で活躍中のピアニスト）。あるいは分析的には極めて厳格だが、魅力に欠ける演奏もあれば（これがアカデミズム？）、若干セオリーからはずれつつも芸術的な香りのする演奏もあり（賛否両論！）、また単に勢いが良いだけでデタラメなはずれな演奏もあった（さすがにこれは概ね低評価）。

この実験では、あえて明確な結論は導き出さなかつた。聴き手の感覚は人それぞれだからだ。確かなのは、同じ素材を扱って聴き手の一人一人の意識や予備知識、先入観に変化が生じれば実に多様な感覚世界が聴き手自身に新たにフィードバックされるといふ基本的な事実だ。多様な評価は多様なまま放つておいた。しかし今まで有名か無名か位しか無かつた判断の基準に、作品の意味の考察やパフォーマンスの実態分析を加えることによつて明らかにデタラメなものを見いだす事が出来たし、また作品の理想の姿を思い浮かべる事が可能になった。この視点を持った聴衆が意思表示を明確にする事がもつと常習化すれば、送り手の質に変化が生じてくるのは明らかであろう！聴き手の聴き所が変わり演奏に対する反応

が変わつて、演奏する側のパフォーマンスの質に変化が生じたならいづれ自然に淘汰されるべきものは淘汰され残るべきものが残るはずだ。

では古典伝統の世界に目を向けてみよう。注目すべきは家柄か？古体の保存状態か？否！例えば能楽であれば、能・狂言の作品が持つメッセージそのものであり、演じ手が身体を通して持てる技術の粋を凝らしているかにそのメッセージを体現しているかが重要であるはずだ。そもそも狂言師とはどうあるべきか。世阿弥は自著『習道書』でこう述べている。「（前略）そもそも、狂言（おかし）とは、必ず数人（しゅにん）の笑いどめくこと、俗（しよく）なる風体（ふうてい）いなるべし。笑みの内に楽しみを含むと云つ、これは面白くうれしき感心なり。この心に和合して、見所人の笑みをなし、一興を催（もよお）さば、面白く、幽玄の上階（じょうかい）の狂言（おかし）なるべし。これ狂言（おかし）の上手と云えり。（中略）それにつけても、数人（しゅにん）あいにん愛憐のしお愛嬌を持ちたらんしょうとく生得は、芸人のみよつが冥加なるべし。言葉・ふつてい風体にも、しよく俗なることをなさずして、きしよ貴所・じょうほうさま上方様のおんみ御耳に近からん利口・狂談をたしな嗜むべし。かへすがへす、おかし狂言なればとて、さのみに卑しき言葉・ふ

うてい風体、ゆめゆめあるべからず。心得べし」（前略……）「いいたい、狂言というものは、いつも観客が笑いとよめくようなのは、俗っぽい演技と称すべきである。「笑みのうちに楽しみを含む」ということばがあるが、それは、おもしらく愉しい感じである。観客のこうした心持ちによく融けこみ、皆が微笑して楽しむといふつであれば、それはおもしらく優美な高級の狂言師といつてよいであろう。こんなのを狂言の名手といふのである。…中略…それにつけても、観客に好感をもたれるような愛嬌を、生まれつき身に備えているものは、芸人として有り難い限りだろう。セリフにおいても、しぐさにおいても、卑俗なことをやらず、上流有識のお方たちにお聞かせしても不都合でないような洒落や軽口を心がけるべきである。くれぐれも、いくら狂言だからといって、あまり下品なセリフやしぐさは、けつして出してはならない。よく注意するがよい。訳・小西甚一）

これは世阿弥が提唱した、あるべき狂言師の一つの判断基準だ。とすると、現今巷の狂言界の有り様は、正直概ね不合格ではあるまいか？しかし考えてみれば、これは安東師匠が日頃からよく口にされている事の一つである。幸い大和座で私は、ここA&Hホール50回に及ぶシリーズ公演を通じてひたすら学び・考え・実践する機会

を与えていただいた。足繁く通って下さったお客さんの中には、月日と共に相当視野を広げられた方もいらっしゃると思う。A & Hの舞台に立つ時、私はホームグラウンドの様な安堵感を覚えると同時に、笑うべき所で笑い、息を詰めるべき所で詰め、歌うところで一緒に歌って下さる厳しい見巧者の視線にさらされて、背筋がピンと伸びるような緊張感も味わっている。これまで50回を支えて下さったお客さんに心から感謝の意を表したい。そして今後もこのホールで、電流のようにスパークする舞台と客席双方からのせめぎ合いが切磋琢磨するような関係性を一層発展させられるよう精進してゆきたいと決意を新たにす次第である。好ましい舞台と聴衆の関係、そのひな形は、まさしく既にここにあったのだ。

(2007・11・25)



井上放雲(いのうえ ほつうん)  
兵庫県生まれ。

相愛大学音楽学部卒業、ポランド留学、国立ワルシャワ・シヨパン音楽院修了。チェリストでもある。日本の舞台芸術理論を学ぶべく、安東伸元に師事。バルト三国・イラン公演に参加。室内音楽グループ「アンサンブル・ベンジェ・ドブジェ」の代表を務め、東西古典文化の間を日々驚嘆の喚声を発しながら往復している。相愛大学と大阪芸術大学で非常勤演奏要員を勤める。

## 物言つからだ2

金久蒼汲

心身一如、心と身体は密接な関係をもっている。以前にもこの紙面に書きました。人間は嬉しいことがあった時には足取りも軽く、気が重くなるようなことがあった時には足取りも自然に重くなります。心と身体は互いに影響を及ぼしながら、その人の存在の仕方を表しているのです。ところで私たちは普段歩く時に、「私は今歩行している。」「右足を浮かせて前へ押し出して着地、重心を左足から右足へ乗せ替えて、今度は左足を浮かせて・・・。」などと筋肉や手足のバランスを考えながら歩くでしょうか。何かの事情で歩行訓練をしている人なら意識しているかも知れませんが、普段歩くことに対して何の支障も無い私たちがそのように意識しながら歩くと、滑らかな歩行はおそらくできないでしょう。意識しなくても普通に歩けるからこそ、私たちは「歩きながら考える」ことができるのです。さて私たちは何かこれまでに体験したことのない運動に取り組む時、始めのうちはいろいろ意識しなければその運動ができません。例えばバレーボールを始めたり人は、「ボールの飛んでくる位置を予測して素早く移動し、ボールのスピードに合

わせてテイクバックし、重心を落とし、腰を安定させ、身体の正面で受ける。「飛んでくるボールを打つのに、どれだけ動きを意識しなければならぬのでしょうか。もちろん最初から全部できるはずはなく、初心者はまず基礎的な動きから始め、どの点を意識したら良いのかを教えてもらい、それを意識し、動きを考えながらボールを追うわけです。最初のうちは、こうしなければという意識はあっても、身体はなかなか思うように応じてくれず、心と身体の動きはバラバラで一緒にはなってくれません。しかし何度も練習を繰り返すうちに、徐々に慣れて自然にボールを打ち返せるようになります。そして、基礎的な打ち方が無意識的にできるようになると、今度は仲間や相手の動きを読んで、誘導したい位置にボールを打ち分けることを意識できるようになり、さらに練習を重ねるうちに、仲間や相手の動きの読みが無意識的にできるようになってくるのです。この段階になると、基礎的な打ち方に対する意識は無意識領域へと沈み込み、意識しなくても自由自在に身体が動くようになります。つまり心と身体がひとつになるといことです。運動の習熟とは、基礎的なレベルの技術が無意識で行われるようになった時、次のレベルの技術に向かつていけるといいうように、無意識的な運動の習熟（心と身体が一体になった

状態）がその前提条件となるのです。

小舞を舞う場合、まず謡と振り（型）を覚えなければなりません。謡を稽古し、作品の持つメッセージや情感を理解していきます。次に動きを覚えていきます。最初は、ここで立ち上がって、次に扇子をかざして・・・などと動きの流れを覚えていきます。もちろん意識するのは身体の動きですが、心の動きは何もないわけではなく、意識に上ってこないだけで、何かしらの動きはあるはずですが、しかし、次の動きに追われて舞っている段階では、見る人には心の動きが十分に感じられません。稽古を重ね、作品を理解し、動きが次から次へと自然に無意識に出てくるようになった時、舞手は自分の身体を把握し、その意識（心の在り方）が、身体の動きとともに表現される。つまり、舞手の心と身体が一如の関係にある時、観客は共感をもってその小舞を観ることができるといいます。

このように運動に習熟するということは、バラバラだった心身の働きが一体化し、動きを意識することなく身体が自由自在に動くようになるということと、自由自在な動きとは、それまで意識していた動きが無意識の領域に沈潜することによって、心と身体の分裂が克服された心身関係の場で可能になるのです。



金久蒼汲（かねひさそうきゅう）  
広島県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。演劇人としての肉体訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。自国の古典芸能を体得し、より人間らしく生きるための「古典演劇教育論」の確立を目指す。二〇〇三年イラン公演、二〇〇四年インドネシア公演に参加。現在、橋本市こども狂言教室、NHK大阪文化センター講師。

# 「演じて癒す自分の心」

原 斗轟

リラクゼーションブームのようです。日々の緊張から解放されたいと思っっている人が沢山いるということでしょうか、「癒し」をうたい文句にした商品をよく目にします。マッサージチェアなど高価な物からお手軽に買えるチョコレートまで、また物ばかりではなく「癒し系」といった、人や動物、植物など多種多様です。そして、これらの癒しを与えるという商品は飛ぶように売れているといえます。このような商品が売れて「癒し」が世間の注目を浴びるということは、年配の方から子どもまでの幅広い世代の現代人が何らかのストレスを感じているという事実が背景にあるように思えます。近年このストレスを解消するため手段として「笑う」事が注目されています。人間はストレスを感じると交感神経が優位になり、精神的に落ち込み、身体に良くない影響が現れます。しかし笑うことで副交感神経が優位になると、血行が促進され、筋肉の緊張が解かれ、その結果精神がリラックスします。たとえそれが作り笑いであっても過度のストレスを感じる人には良い効果があるといえます。これを裏付けるかのように人々がテレビを最も視聴する

時間帯は、「笑う」事を主にした番組が数多く放送されています。また「泣く」事もストレス発散に効果があるといえます。感動して流された涙には、体内から涙と共にストレス成分が排出されるそうで、「泣ける」「涙がとまらない」を売り文句にした映画・ドラマが人気を得ています。

しかし常にストレスを発散し癒されていると思う「癒し」志向が少し過剰になっていると思いませんか。必要な栄養も取り過ぎると毒になるように、過剰な「癒し」もまた毒になります。私は「癒し」とは痛みを鎮める鎮痛剤のようなものだと思うています。どうしようもなく襲ってくるストレス（痛み）を和らげ自分自身を正常に保つためならば「癒し」も必要です。しかし次第にストレスに弱くなり「癒し」（鎮痛剤）を過剰に摂取し始めたのならば注意しなければなりません。ストレスを癒す為に

りますが、全くストレスを受けていないと、逆に免疫力が低下し病気にかかりやすくなってしまうのだそうです。このようにストレスは発散と蓄積のバランスが大切ですが、そう都合よく保てるものではありません。そこで私は発想を転換させて、ストレスを、発散したり回避したりするのではなく、何らかの方法を使って自分のエネルギーに変換できないかと考えています。その一つの方法として考えられるのが演劇において役を演じる事です。

ストレスを感じ始める人がいないとは言いきれません。しかし現代人が感じるストレスの多くは、職場や学校など絶対に避けることの出来ないコミュニティーの中で生じるため、それらのストレスを癒しきれないという現実もあります。かといってストレスの原因から離れ一切を遮断してしまえば外からはストレスを受けることがなくな

役（登場人物）を演じる時は物語からその役を分析します。物語の中でどのような役割があるのか、役同士の人間関係はどうなっているかなど物語からその役の全ての情報を汲み取ります。役の人物がどのようなのは演じる人の感性によって決まります。例えば役の人物が笑う時、爆発するように笑うのか、小さく抑えるように笑うのか、それとも押し殺して笑うのか、といった具合に演じる人物の感性次第です。これは喜怒哀楽その他全ての表現においても同じことが言えます。そこでストレスが表現を爆発させるための起爆剤になると思つのです。ストレスという言葉はそもそも外部から受ける圧力という意味があります。圧力は言い換えるとエネルギーです。ストレスという単語がいつしかマイナスのイメージでは

かり使われるようになりましたが、私達は常に喜怒哀楽すべてのストレス、つまりエネルギーを外から受け、心の中にそれをエネルギーとして蓄積しているとも言えます。この力をただ単に発散するのではなく、演じる事でもう一度感情のエネルギーとして再利用するのです。表現することで日常では気づかなかった自分自身の喜び方、怒り方、悲しみ方、楽しみ方を知り、自分自身の新しい発見として蓄積されていきます。この変換方法さえ身体の中に取り込んでしまえば、日常生活でも生かされ生き生きとした自分へと変わっていくことが出来ると思います。また演じている自分を家族や友人、職場の人間に見せることで、同じ時間を共有した体験がそれぞれの身体に残り、新しいコミュニケーションの形を作っていきます。実生活の中で回避しようのないストレスが自分を豊かにし、それによって周りの人間関係が良くなれば、根本的な解決の糸口を見つけることができるのではないのでしょうか。

日々の生活の中でホッと一息つくような「癒し」を確保することは心のバランスを保つという意味では必要と言えます。しかし世の中にストレス解消とうたった商品や様々なストレス解消方法が氾濫しているにも関わらず、ストレスが原因の事件や事故、病気などが減少していかないのは、それら

の「癒し」がまやかしかからだと思えます。それでは一時的には解消されても、永続的な結果を得る事はできません。世にあるこれらのもの全てを否定するわけではありませんが、これらの多くは自分を癒しているのではなく、騙してただ慰めるだけになってしまっているのではないのでしょうか。ストレスを溜め込んでしまつ前に、エネルギーに変換する方法を自身の中に取り込み自身の新しい力を発見してみてはいかがでしょうか。



原斗轟(はら とつこう)  
福岡県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義において安東伸元の薫陶を受け、卒業後安東伸元に師事。古典の力を体内に埋め込み、現代演劇の様々な分野で生かすべく自身を鍛えている。二〇〇七年八月『兵士の物語』に於いて兵士役を勤める。

## 「古典のリズム」

久保朋子

私たちの身体はいくつものリズムを刻んでいます。歩行、鼓動、呼吸、まばたき……。これらのリズムは、身体を取り巻く環境や状況、感情によってとても繊細に変化します。例えば呼吸のリズム。リラックスマスして気持ちが安らいでいるときには、深くゆったりとしています。感情が高ぶり、興奮していたりすると、浅く速いリズムを刻みます。調整するように頭で指令を出す間もなく、身体は様々なリズムを刻みます。

私が初めて安東先生に出会ったのは、大学一回生の「古典伝統芸能研究」という授業でした。それまで古典といえば、国語の授業の「古文」でした。教科書には『源氏物語』や『枕草子』の抜粋が載っていて、古語辞典を片手に現代語訳をし、英文を訳すような作業をして読み解きました。古語単語をたくさん暗記し、動詞の活用を覚え、頭をフル回転させて、テストや受験に備えたものでした。古典とは、多くの知識を持つて取り掛からないと味わうことのできない、チンプンカプンのあくびの出るようなもの、というのがそれまでの私のイメージでした。しかし、ある日の授業中、安東先生は『雪山』の謡を「春ごとく」と唄ったあと

「ねんねんころりや、おころりや」と子守唄を続けて唄いました。「テンポが同じでしょう?」と先生。私は、「ホンマや。」と思いました。それは頭でコックリ頷くのではなく、身体全身で頷いて納得したような感覚でした。子守唄が古典か!と思うと、中学・高校と机の上で勉強した古典がどこかへ飛んでいってしまいました。子守唄は眠るための唄、ゆったりとしていて、とても心地良いリズムです。教わったわけでもないのにそのテンポは、潜在的に身体にインプットされています。母親が子供を寝かせようと、手のひらで調子を取りながら唄う子守唄。そこにはメトロノームも五線譜の旋律もありません。ただそこにあるのは、この子が安心して眠れるように、という優しい気持ちだけです。『雪山』も大切な人の身を案じて祈る謡です。そこには二つの共通する「安らぎ」というリズムがありました。

さて、先日の稽古で『暁の明星』を舞いました。舞い終わった後、いつもより呼吸が速くなり身体が熱くなるのを感じました。それまで感じていた安らぎの小舞ではない不思議な感覚で、これは何だろうとぼんやりしていると、先生が「この謡はアルゼンチンタンゴのようなもの」と言いました。そのとき、私はまた「ねんねんころりや」を聞いたときと同じように身体でコックリ

頷きました。東西の空に「チロリチロリ」と瞬く明星を、舞の型では、首を左右に振りながら表現します。その首のアクセントは、スピード感がありラテン的です。また、「キリリンキリリン」と足拍子を鳴らす型は、(タンゴではありませんが)スペイン舞踊の足を踏み鳴らすのと同じで、心を掻き立てられます。それに「チロリチロリ」や「キリリンキリリン」という言葉の響きは、何だかハイカラな感じがします。

ところで、『暁の明星』は、暁の別れをする男女の情景を描いた謡ですが、小舞そのものにも男女の駆け引きのようなところがあります。地謡と舞、それぞれが同じものを表現しながら、間合いやテンポなどでリードやフォローをし合います。地謡は舞い手が舞いやすいように唄います。まるで女を美しく見せようとエスコートをする紳士的でとてもフェミニストな男のようです。謡のエスコートを背中聴きながら舞うのは女です。せっかくのエスコートを上手に受ける為には一人身勝手に振舞ってはいけません。また、もたれ過ぎて完全に身をゆだね、踊らされてもいけません。自分の足できちんと立ち、しっかりと前を見つめて進むことのできる自立した女でなければなりません。時に譲歩しまた誘導する、お互いの呼吸を確かめ合いながら駆け引きを楽しみます。そんな中、計算ではない何かが

びたりと重なる瞬間は最高です。そのとき観客は、言葉にならない心に響くものを感じ、舞台の空間はイリュージョンに包まれた世界になるのです。タンゴを奏でるバンドネオンの響き、男を見つめハイヒールを履いて情念たっぷりに踊る女。タンゴや『暁の明星』には「情熱のリズム」がありました。

古典は、様々な装飾を削ぎ落とした人間の本质に一番近い最もシンプルなものだと思います。いくつもの時代を勝ち越してきた横綱力士みたくです。どの時代においても大衆が共感し合い、自ずと残ってきたものです。安らぎのリズム、情熱のリズム、全てのリズムは人間の身体の中にあるリズムです。だから共鳴し、身体が反応してコックリ頷けるのだと思います。古典のリズムとは、人間のリズムです。

流動的な時代、肥大し続ける情報とインスタントなメディアにさらされ、私たちの身体はとても危険な状態にあります。神経が敏感であればあるほど影響され、揺らぎ、病気になるります。昨日善だったのに今日には悪になる、何を信じていいのか分かりません。結局信じるべきものは自分だと気づいたものの、持っている(と思い込んでいる)自分の物差しには全く自信がありません。私は紛れもない、二十一世紀の肉体を持つ若者の一人です。私は今まさに実験中

です。古典を身体に浸透させてゆくことで軌道修正を行います。美しいものを本当に美しいと感じることのできる精神、人間が本来持っているはずのエネルギーに満ち満ちた魂を取り戻さなければと使命感を感じています。

最近、先生や先輩にくっついて色々な稽古場にお邪魔しております。「見学させていただきます。」と言いつつ、やっぱりじつとはしていられない性質なので、一緒に稽古に参加し、発言をしてみたいです。そこでは生徒さんや学生、子供たちが私の師となり多くのことを学びます。古典の力が、現代を生きる人間にどのような影響を与え、変化するのかを自身で感じ、他を見つめて気づきます。その発見を通信を読んでくださる皆様に、少しでもお伝えしたい、いえ、「お伝えせざるまい」とて、この度も原稿を書きました。私のこの出過ぎた振舞いをどうか皆様、許させられい許させられい……。感謝を込めて、幕。

### 将惶の新局面

「舞台の演出方法」

劇場で上演されるお芝居やミュージカルなどには豪華で大掛かりな舞台装置や色とりどりの照明を使用して作品の雰気を作り出している公演が多いと感じます。その様な公演を大きく二つに分けてみますと、舞台装置や照明を作品の中に綿密に取り込んでいるものと、見た目の派手さで刺激を与えるものがあります。前者の様な公演は観客の心を惹き付け、感性を刺激するため魅力を感じますが、後者はスベクタクルで刺激が強く興奮はしますが、何かを感じたり考えたりするところまでには至り難い気がします。

お芝居やミュージカルとは対照的に、能や狂言を上演する能舞台では劇場のような舞台装置も無く照明も白色灯が点いているだけです。この「何も無い舞台」という手法により、観客はそれぞれの想像力で風景や状況を自由に膨らませて楽しむ事ができます。自らが想像するという行為は意思や人間性を育む事に繋がると思っています。それにはもちろん、演者が観客の想像力を掻き立てるようにしっかりとメッセージを伝える事が大切になります。

古典芸能に限らず、感性を刺激したり想像力を豊かにしてくれる芸術とスペクタクルなものがバランス良くあれば良いのですが、残念ながら身近にあるものの多くはスペクタクルなもののみが重視されたものが目立つ気がし、バランスの悪さと危うさを感じます。

## 大和座狂言事務所関連

### 催しのお知らせ

一月

二十日【日】

大阪芸術大学舞台芸術学科『狂言レビュー』

開演：午前十時

場所：堺能楽会館

入場：無料

二十五日【金】尾鷲『市民狂言鑑賞の夕べ』

開演：午後七時

場所：尾鷲市民文化会館（せぎやまホール）

入場：大人 1,100円

高校生以下：500円

演目：『狂言・口真似』

主 人 金久蒼波

太郎冠者 小田兆紀

客 寺西将惶

後 見 原 斗轟

「禰豆山伏」

禰豆 金久蒼波

茶屋 安東伸元

山伏 原 斗轟

大黒 安東稜子

・講話と演習 お話と歌唱指導

お問い合わせ：尾鷲市民文化会館

〇五九七・三三二〇〇〇

二十七日【日】『新春狂言』

開場：午後二時・開演：午後二時半  
場所：京都府長岡京記念文化会館

入場：一般 二二〇 円

学生 一七〇 円

演目：「三番三」

「佛師」

「素襖落」

お問い合わせ：天満天神繁昌亭  
〇六六三五一四八七四

時

十七日【日】『橋本こども狂言教室発表会』

開場：午後一時半・開演：午後二時

場所：教育文化会館 2F大ホール

入場：無料

お問い合わせ：橋本地区公民館

〇七三六二四二七五〇

二月

一日【金】『蝶六の会々落語、そして狂言』

わわしい女・したたかな女

開場：午後六時・開演：午後六時四十分

場所：天満天神繁昌亭

入場：未就学児入場不可

前売り 二〇〇 円

当日 二五〇 円

小学生 一五〇 円

身障者・高校生・大学生 一八〇 円

演目：・狂言「因幡堂」

夫 森五六九

妻 金久蒼汲

「貰い婿」

婿 小田兆紀

妻 原斗轟

舅 安東伸元

・落語「三枚起請」 森五六九  
他 桂つく枝・桂三四郎

三日【日】『紀ノ川市民狂言会』

第一部：開場 午後十二時半・開演 一時

第二部：午後二時

場所：教育文化会館 2F大ホール

入場：無料（要申込み）

演目：「蟹山伏」

山伏 小田兆紀

強力 原斗轟

蟹の精 寺西将惺

「佛師」

田舎者 金久蒼汲

スッパ 安東伸元

お問い合わせ：橋本地区公民館

〇七三六二四二七五〇

七日【木】『金蘭会学園高校狂言鑑賞会』

非公開

十一日【祝】『艸言会』

開場：午前九時 開演：午前十時

場所：山本能楽堂

入場：無料

二十三日【土】『なりひらの恋』

～高安の女《伊勢物語》より～

開場：昼の部午後一時半・夜の部午後六時

開演：昼の部午後二時・夜の部午後六時半

場所：八尾プリズム小ホール

入場：全席自由

前売り

一般：三〇〇 円

十八歳以下：一五〇 円

当日 一般：三五〇 円

十八歳以下：二〇〇 円

お問い合わせ：プリズムホールチケットカウンター

〇七二九二四九九九

2008年

2月20日(水) 午後2時開演

A&Hホールシリーズ公演 VOL  
「古典伝統芸能と出会うひととき」その五十一

## 《笑劇の古典力》 古典を背骨に

## 新春の新生を祝う舞の数々

意表をつく舞と言葉の握手

「洋のリズムに和の動きが添う」

そしてさらに、和歌と音楽の拍が響きあう、  
不思議な世界

## 歌唱演習

日本語のセンスを磨く、

室町の民衆「狂言小唄」

## 狂言『鑑』

主人 安東伸元

太郎冠者 金久蒼汲

スツパ 小田兆紀

後見 原斗轟

入場料 会員 一五円

一般 二〇円

学生 一五円

小学生以下無料

お問い合わせ A&amp;Hホール

〇六六八七三二六七

## 編集後記

プロの厳しさをきちんと知った上で人生をかけてその道を進みたいと願っている人を評価する場合、評価基準となるべきものはその人の技術や能力であつて、生まれや育ちであつてはならないと思います。表面きは古典芸能を広めようと言いつつ、古典芸能に古典芸能の授業をさせつつ、古典芸能に本気で魅せられ人生をかけている若者は拒否される現状をみえていますと、結局日本は本気で日本の古典芸能を守っていく気がないよつに思えます。または、日本の古典芸能は若者に魅せられる訳がないと、自国の文化に自信がないのか・・・大和座の若手は舞台の厳しさや古典の重さをしつかり考えながら、プロとしての活動を目指しています。大和座の活動が、本気で古典芸能に魅せられた若者達の希望になればと思います。さて、今年も無事に大和座通信を6回発行することができました。大和座通信は大和座の古典芸能に対する姿勢や考え方、そして何を目標しているかを座員の皆が真剣に考え一所懸命書いております。その思いは通信を読んでくださっている方々にも伝わっているようでお手紙を頂く事も多々ありました。皆さまのご理解に大和座は勇気付けられております。

今年も大和座は様々なことに挑戦し、そ

れを形にしていまいりました。まだまだ大和座に吹いている良い風を感じます。2月23日、井上満寿夫・あべ泉作、志賀山勢州演出の『なりひらの恋』に「なりひら」役で出演する小田兆紀にもどうぞご期待ください。

来年のA&Hホールの新シリーズは『笑劇の古典力』です。良い舞台をつくりあげるために全力投球してまいります。皆さまのご来場、大和座一同、心よりお待ち申し上げております。皆さま、一年間本当にありがとうございました。良いお年をお迎えください。

秀

発行日 二〇〇七年 十二月十二日

編者 許秀美

発行者 安東伸元

## 大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五六五〇八四一

吹田市千里山東二丁目三之三

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

<http://homepage3.nifty.com/yamatoza/>  
e-mail: NQC57616@nifty.com